

(別紙2)

審査結果の要旨

氏名 前田 弘毅

本論文は、16世紀初頭から18世紀前半にかけて、イラン高原とその周辺を統治したサファヴィー朝政権下で、政治的、軍事的に強い影響力を有した「ゴラーム」と呼ばれる一団の人々の起源、実態、特徴を、ペルシア語、グルジア語、それにヨーロッパ諸語の史料を駆使して解明した文献学的研究である。また、王朝政府がその支配機構にゴラームを導入した背景、経過や結末について分析した政治史、制度史の分野の論文としても重要な意義を持っている。

サファヴィー朝時代の後期(17世紀以後)に、宮廷や地方統治の場で活躍するゴラームについては、従来からその実態解明の重要性が指摘されながら、本格的な研究がなされていない。その最大の理由は、サファヴィー朝宮廷の言語であるペルシア語で記された断片的な史料を読むだけでは、ゴラーム集団の具体的な姿を把握することが困難だったからである。本論文の価値は、ゴラームの出身地であるグルジア、アルメニアやチェルケスなどコーカサス地方の言語のうち、とりわけ多くの情報を含むグルジア語の史料を活用し、さらに新発見のペルシア語史料も用いて、この壁を完全に突き崩した点にある。

ゴラームが、すでに16世紀の半ば過ぎには、サファヴィー朝宮廷で政治的影響力を持つようになっていたこと、彼らが戦争捕虜として宮廷に送られたのではないこと、ゴラームが従来知られていた以上に多様な文武の官職に就いていたこと、「ゴラーム」という語が必ずしもコーカサス系の人々だけを指したのではないこと、ゴラームは一枚岩の硬い団結を誇る集団ではなかったことなど、本論文が明らかにした事実は、主にヨーロッパ諸語の史料を用いて論じられた通説(その最新のものは、2004年に英語で出版されたババーイー他著『王の奴隷：サファヴィー朝イランの新エリート』)の多くを覆した。特に、グルジア語史料に拠って主要なゴラームの四家系を復元し、グルジア王家や貴族の出身であるゴラームが、元来の地縁と血縁の絆を保ちながらサファヴィー朝に仕えていたことを明らかにした点は、イラン史のみならず西アジア史研究全般に対して大きな意味を持っている。ゴラームはしばしば「奴隷」と翻訳され、地縁や血縁を絶ち個人として君主に仕える「奴隷軍人」の一例とされてきたが、本論文によって、「奴隷軍人」という形での安易な一般化が有する問題点が明らかになったからである。

社会科学的な理論化を意識するあまりか、「異人」「周縁」など厳密な定義を要する術語が不用意に用いられ、概念化や論理構造が不十分なままでの議論もときにみられる。しかし、本論文が全体として高度な学術的内容を備え、16-18世紀のイラン高原やグルジアの政治史、制度史研究への重要な貢献であることは間違いない。審査委員会は、全員一致で本論文が博士(文学)の学位を授与するに値するものであるとの結論に達した。